

農家調寶記二編全

特279

特279-264



1200501132175

第千百金號

m 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15

始



龍背師傳圖說

太田錦城先生直傳  
門人荒井堯民老人著

金三册

此書ハ世ニ稀ナル家相ノ祕書ニテ家造ノ形相比面ノ張次等ヲ  
画圖ニ顯シ圖アトニ口傳ヲ述テ住人盛衰ハ元ヨリ妻子眷屬ノ幸  
不幸親子ノ間ニ故障アルト片輪ナル子孫出生スル事ト人等  
三不忠ナル者是アル一家ニ崇ル少納所持ナス又ハ火難水  
難病難色難盜難等ニ至ルニテ悉ク眼前ニ知得リ妙訣ナリ  
錦城先生家相師傳ト跡シ著所ノ書既ニ先年龍背炎祕寒  
著ス次テ師傳圖說此度成ル追々雕刻シテ世間ノ寶トセーフ  
希願ス

掛山町三丁目 和泉屋金右衛門梓

農家調寶

社二編圖錄

○伯叔の家入母妻別々の事

○遠頬の事 緑者

○氏神生太神の事

○田の吉凶と探じる湯の事

○累日時計兼ねて圖記を採

○土地田畠畠の用字

○諸宗門の傳來

○八宗十字の事

○親類の事

○三族九族と云事

○経父嫡母の事

○今之界とそら事

○大地田畠畠の用字

○諸宗文一札の素文

○町場店舗狀

○周辺文状

○家賃魂文某家守護狀の類一れ ○贊版送牒見一れ

○離縁狀 ○口論板内裏牒文訃通 ○裸牒文

○日用相場卑割品々 ○金を多の様で銀を少と加

○卦未の清を銀を多と加 ○卦の相場被

○爻物の天附 ○爻物割武筆

○末小壹の義相場割四筆

○末清の相場被卦筆

○爻物割武筆 ○末小壹の義相場割四筆

○利是卑算共用例割奉向割の予算不く

○末清の相場被卦筆

○末小壹の義相場割四筆

## 農家調寶記二篇

東武 高井伴寛翁 編

### 二族九族と云事

凡支歸へ人倫の榮家道の根をも、匹支下族の末と之  
ども、元と叶へば子孫繁榮奉じ、支派の別  
親子のり、子有て孫と生せ。是とニ親じ、父の兄弟已く兄弟。  
然子は兄弟の男女以ニ族と云。親へて同じ族ハシズヒ也。  
已く父祖又曾祖父も祖父まで、續の名前ても祖父の父也。

續の名をかく。支る前、後代者も先祖と称せし。又孫  
若孫を孫と、續の名もて。玄孫の子か、續の名も如く血脉  
を繼へ。後胤も然れど或へ、仰代の孫と云是へ備已よりと云也。  
下小口の肉親尔。又兄弟の男女。子孫の男女有已と俱ニ九ツ  
かうゆへ歟。而して九族とい云。二族は直系親も九族には小説を  
失へ。九族の名を等く已う六代ある。而は父も母乃  
血脉の外から。九族ハ續の名りかれた事也。他人舅父蟹、  
父母の兄弟。伯父叔父妻子、從弟。其子は從弟達もす。又

從弟妻子ハ續の名をもより丈の他人へ又侄子と云  
九族の内。祖父母の兄弟ハ大伯父大叔父妻子、從弟達  
もす。又從弟妻子ハ他人へ兄弟の子、男、甥女、姪妻子  
男ハ又甥女、又姪妻子ハ代人へ又甥又姪と、九族の内。又  
の伯叔父母の父母ハ大伯父大叔母妻子。父母ハ曾祖父母と  
伯叔の文字、兄弟の姓と云ひ。元本兄弟同人あり。ハ伯仲  
叔季の口々也。伯父叔父叔父妻子父妻子おちて。伯母も

は例。今日本の准伯叔の二字が用ゐるゆゑに、ひが父の兄かぶ  
姉人をも伯父。己が父の子、准叔父。己が父の姉、伯母妹を  
叔母とし、母の兄弟姉妹も是ふ固く。伯と叔、母の兄弟を  
姉り妹りば別の名を稱す。士の家はまへれ連へ、父方か、母の  
字母方か、叔の字を用ひと覺へ。族まで深く、源氏も御家を  
も得遠くももまくなん。母方をも母の兄弟、母方の伯  
父姉から、母方の伯母へ父の身、父方の叔父姉、父方の叔母  
と呼べし。ひが父の伯叔父母と大伯父大叔父大伯母大叔母と  
称する。も伯叔の姓へあふ云ひし。諸兄弟の續と、明白覗  
ども。従弟の子と又従弟と見えてる。もて方、ゆり際く従弟従弟  
遠又従弟を次へ續切て化人と覺へ。又従弟女と相まへ

○親類の事

祖父母。父母。妻。媳娘。娘次男。二男。娘孫孫女兄弟。嫡嫡伯父。  
叔父。伯母。叔母。甥。姪。従弟。従弟女兄弟。嫡嫡伯父。  
従弟と生く立るゆゑより。伯父。姫孫孫女兄弟。嫡嫡伯父。  
ひが父へ出生して。も男子の次小五と。男あかく女子へ婚と

夫たゞ、慈願の如く聲表す。或は小要合する女が法事也。  
是ハ家督立て、次男ニ男より上立て、兄ハ法事ある。又  
已う妻小立て、慈願小立ね厄介也。或は小出孫、縁りしども。  
妻附くものや、先よりよ小出もて慈願は其の法事也。  
之の如き親類ハ互に忌彼と見て親むる。忌彼されども、  
家附ものや、  
縁者ありうし。

○遠類兼縁者の事

大伯父、大叔父、大伯母、大叔母、又甥、又姪、遠縁者遠親也。  
又從母女兄弟とを類と云九族の内をもとも互に忌彼と見て縁者  
といふ者也。同前。又舅姑と孫已う妻の兄弟、小舅、甥妹、小姑、已う娘女也。然る  
先の婿已う次男、二男と化かの表ふにきせし先の娘女とを類  
い續も縁者、續也。御とも却てを類たり。親はよのくは外  
姻姪又、舅姑の兄弟姊妹、妻の伯叔父母、子孫の縁者等  
あひは、伯父姪叔母、姪甥姪姪也。又曰、寄附也と云うて、  
化人へ傳母、忘後以ての親事とも、縁母の父母、姑、徳親類の  
皆化人へ是も経母小養まつる、義母也、或は類、常母方の

親類のじ在の通親類とを別と縁者とは夷別れと云ふ。農商の事より悉く夫婦妻の里方は親類と眞婚の家元。  
女の縁付より先の親も親類と称せ大がる様に血脉を以て  
親を遠ざけ遠れ血脉をく疎ほり親む縁者あり。但  
農父母親父母聲を失す。慈順の母かく血脉かくく親を  
かく、捨引の母へ親れ生じる母は必ず種をあると。元又  
改正の抜忘令と云ふのと是と異て親を遺棄て寛小遣を

### ○継父嫡母の事

継父、己が父没せり遂至後嗣に入支せり。己が母を縁の  
先へ連り二つの内也。血脉かくに父くる声の人ふなりと之。  
されど源義經を母常磐平清盛、公家具一たる食味禁  
継父清盛と書て農家のどもかく入支の継父、義經の  
ども多親も、化人母の連て縁付より先の継父、義經と  
の子をも。父のを妻とするて嫡母と称せ農家の主肩  
そへ知ぬとり。嫡母の教育法は更なる農家の主へと之を

なくも富むせし、どこまでも嫡母より血脉、かくも拘り  
お親故に嫡母の親類と、世人かくと絶母の同ト儲は民  
の風俗と見る。九族と親睦の道別く農家、厚く寢も贋  
賢の者に食と云下し、おと親九族と親とも絶ふへりし村中  
の附合年長とぞそぞ歎ひ已と深高を禱モ之とも食へ  
之を以て、自ら天道神明の懸めり、人生を先づ  
等々父母と奉て養育ばかり、漸成長して妻と連帯おと  
姪と、家の食がねえもじらず、是不廉、よしと出来已ば

妻の愛ふ溺き。レアラ寒ふも親と疎。老親隠居。已うお留  
とぞよ及て、唯妻子のをあむの者と思ひ親、郊广よりと  
なり。隠居か徒然として夕の向青住まへ拂ふかり。誓  
ふ一時もよくせばまくとば莫ふ又見か。よきのとくまで  
育立命ふ各欲を紫るじと自然と是財薄く世人食ふ  
君の妻とよき、ふ等く疎く後少物と浮し内を仇敵のとく  
縁情色毫毛の道實かがれぬ經今來小人もし父母娘と  
產育劬勞せし以恩く遠を乳母と食筋と挂せるらば

思ひ人の性と東からりの父母と無縫あるまへて。年少婦  
幼少ちて育時は父母の膝下小遊合（レバシタマシマツル）。成  
まし。けむと遊き。孝情慈愛の道もよりぞえ。通じ  
ゆく教唱。書も拂通と全ふを以。御書の文も見より伝  
写也。

○氏神生玉神の事

氏神と云。居村主處の鎮守。生玉（カナヒコ）。天地の神也。生  
玉神と云。武、徳勢あえに續ても其位也。日本小史  
者、貴も財も皆神の所産也。もし怪に身をふ。父親の  
靈落りる。子孫へ云侍も生玉也。御姓也。の人かや  
かど。氏の神も如く。而の神も氏神かも生玉神也  
ともむと。家也ども。農夫は生玉の靈也。生玉也。  
由緒も仰ぐ。古事記。故村也。小清也。と仰き。此の法  
神。左東の法度中興の勅語。移して中古。神號を耳訓

ぬあり。往來も延長式社名帳等ふ有る。不ふの神社也。  
涙祠とて常用のりのと定ら至てくだべバ一村役事の作と  
云ふよ。満ちとせんか色ハ採用仕事、以模する事。採用の祀也。  
天照大神 一社 宇佐八幡 一社 唐蘭男命表唐蘭男命。中  
南男命 一社 神功皇后 一社 合て西御明神と稱す。如なりと  
辨か。往作も未増加すべく思ふ。又ぞ有る神社は祀る  
如トナリ。原出也。

職邊太神宮 佐勢内主又作難 佐勢明神 聖岐天地 佐夜彦社

佐木社 佐木中將 生玉社 天生玉命 生田社 桂舟天照大神の  
妻 桂舟市杵島姫命 佐木社 天心母湯御津瀬 久伊御神 桂舟大己貴命 桂舟  
大己貴命 佐木金刀比羅子也。桂舟大己貴命也。孫玉社  
桂舟八幡宮 佐木守 佐木元子也。桂舟大己貴命也。孫玉社  
桂舟八幡宮 佐木守 佐木元子也。桂舟大己貴命也。孫玉社

明神 佐木 佐木守 佐木元子也。桂舟大己貴命也。孫玉社  
箱根社 箱根 佐木守 佐木元子也。桂舟大己貴命也。孫玉社  
土師文 茅原姓の祖神 棒名權現 佐木  
十社 佐木守 天照大神牛頭天王 佐木守 佐木元子也。桂舟大己貴命也。孫玉社  
稻田神 佐木守 佐木元子也。桂舟大己貴命也。孫玉社

伊弉諾命 丹生社 祭御射國的作 犬山  
伊弉冉 丹生社 金作 犬山  
豊受太神氏 豊受太神氏  
主常立音

豐受太神 帝神功  
戸隱明神 多力祖命  
竹生島社 竹生島社 魂稚母神  
天と小陸照神社 武瓶  
化コ・小陸照神社 小陸照神尾上社  
大原社 撫御  
春川信の是 大原社 和氣大福

神田社 武瓶 大原社 大正寺  
大原社 春日圓社 大正寺  
春日圓社 大正寺

春日社 武瓶 大原社 和氣  
也春日社 根命天照主神 大原  
春日社 大原

春日社 大原  
春日社 横須賀市長大雅 猿田  
神田社 春日圆社 大原  
春日社 大原

春日社 大智月神  
春日圆社 大智月神

春日社 建造主神 善譽社  
春日社 善譽社

春日社 和名大己見の母  
春日圆社 車代主神

ト云城尼如笑然ば先も。云  
うを祐忍ふ祀る 宗像 因心取えれ修小素盞鳴の事也  
櫛姓のもの 櫛石  
障壁廟 室洞神 横石  
の地 うか葉神 と櫛森洞神  
本立御祭大日本三不食の事也  
大義達摩大權現と称せ 異彼宮  
云大聖 やくらうま  
の神 恶鳥社 和良  
の御 廉川  
尾社 大忌所命 わく浦社 犀角  
比社 有家前限御奉  
仲哀帝の廟 あ東沙別命 源吉支社  
櫛作 菩薩小公  
櫛作 と云是く 僧士惟現  
本元開那耶

城邑  
葛杜金人觀王  
布留社十幅劍  
高櫛鬼上弦月中の轍  
高櫛鬼因車成也  
廣嗣橘蓬萊文富子圓丸  
當承相去納智異  
武昌  
喬文朴劔皇帝  
天照大神  
食糰天孫  
天照大神  
紀國阿彌津彥阿彌  
御模文津彌二神  
社紀良  
蟻通上泉名  
社  
天然志津志臺灣因車成也  
美岐連楊桂命み度

赤城社 とみ 秋葉權現 まつめ 愛宕權現 あたご 墓  
聖德太子の師 あやめ 越前 あさひ 穴穂文 あなほぶ の歴史  
日置が裏と合せ ひき 足羽社 あしわ 錦糸帝 にしきい 二枚社 にまい  
神社と云 いふ 神社 じんじゃ 佐倉山 さくら 七石 しちせき 大色  
鷹川小国 たかがわ 二室荒神 にむろあらじん 寶物神 ほうもく 連  
枝井天 えだい 和歌 わか 鹿毛權現 しかげ 安國寺の奥 おんこくじ 塙摩社 なづま 伊  
磐之 いわ 沼邊坂 ぬべざか 実相院 じつそういん 赤堀 あかぼり 坐摩社 ざま 伊  
赤洋天女 あかひやてんの 鬼子母神 きこもじん 貴ノ田明神 きのた 高倉津久 たかくら 伊  
傳牛 でんぎゅう 御園社 ごえん 大蛇と奉せ牛 おほへび 天空と云 あまく 鬼子母神 きこもじん 附  
吉良津 よしらづ 鬼子母神 きこもじん 温泉の社 おんせん 小義權現 こぎ 伊  
現 あらわ と忍法性妨 しのばくせう 二鴻主 にこうし 横沼 よこぬま 仁利御世神 にり  
現 あらわ 故の鬼 おの 二輪社 にりん 大正尊 だいぜいそん 二種手造 にしゅてうぞう 伊  
櫻井 さくらい 宗祇帝の廟 むらき 向旗社 むかはた 喜多彌金 きたみ 水尾社 みずお 内波  
水分社 みずぶ 兼起院武と左右 けんぎいん お鹿社 おしか 南方刀矢社 なんぽう 佐倉  
ふと、達也名方高令 たつよ 天照 あまてらす 佐倉 さくら 向葉社 むかはた 佐倉  
下六坂入脇とする しも 神明社 しんめい 佐野 さの 向葉社 むかはた 佐倉  
櫻井 さくらい 宗祇帝の廟 むらき 向旗社 むかはた 喜多彌金 きたみ 水尾社 みずお 内波  
子 こ 天惠被耳 あまめ 向旗社 むかはた 加賀守時 かが 墓  
の姓 うぶ 下毛根土 しもね 十源師 じゅんし 墓 お 仁富 じんとみ 沖佛大  
比叡小比叡 ひきし 社天司祠 あまつかし 般神社 はんじん 武昌高輪又社軍師 ぐんし 仁  
四度 よの 遠一笑 とおいつわ 有村の昆蟲 くわく 蛇毒鬼神 へき 名金神 なみきん 仁富 じんとみ 大野  
天野 おおの 主室神 ぬしむろ 法師の祀 し 豪天野 ごうてんの

教義の

執金星社佐小路年の二ノ子

青色金星火之

火之又

喚云  
作又庚申

因赤神日木の御

因赤社比嚴國神主祭

松鹿

の神と川

天忍穗耳是亦二種の神

庚頬社和民移田大忌

比良社山王

十握師羅火之

比賣諸名社拾足天稚歲の事

天社江品

天神二座大正也

比賣諸名社拾足天稚歲の事

天照大御命根命

牧星社御品

牧星社大正也

冰川社武品

杜本社御品

石高權現御品

石高權現御品

石高權現

御品

佐高權現

○八宗十宗諸宗つの傳來

農家各の宗門以も。禮那寺は農地をすくらひ。生祖

代の史跡と世代と稱し。も餘代、卑世の事か  
また。追後の人忘へては。續へ表すう始ふ。  
先の家と供表せば如何。け方、志あく。附法事  
を坐し。知者懲意の戒名以持佛小張並る。まことに鬼  
小切くにして坐と云て。愚昧の至る。況や附縁法界と。見  
も知れぬ異は空へ笑ひ。と生祖と。血脉  
あくわく。往以疑して祀。感應も有り。傍家に三界  
系矣。此後表す。私氏の法。立承ふ。かねて。歎宗の  
善惡は論。もハ安益く。惡に宗門を。公もて立。善き  
謂す。安去の宗論以承も。朝廷少て名信。家緒退す  
きる。記録ふも。是ども。至實。叙述如東再生。而て刪  
ふあく。も。まの。徳劣。寔。之。以。也。又。も。支。の。宗。の。之  
の傳。家祖と仰ぐ處。と。ゆ。に。徳名。自己の。宗。神。以。無  
き。爲く。律宗。お律宗。取る。ノ。第。四。祖。優婆鞠多。尊者の  
才。子。墨。出。世。以。室。と。立。唐。古。少。て。南。山。の。通。宣。和。滿。日本  
人。皇。寧。二。代。孝。謙。帝。の。太平。徳。宣。と。年。裏。の。括。提。寺。の

經高和尚法來てし宗門と。戒權の院。△三論宗。新あ  
より第十四祖。鶴林樹善薩小出。妙摩羅什。祖と。唐去  
ハ延無中の吉菴和尚日本ハ三十代推古天皇三十年。  
ある康王は惠灌僧正元興も小吉てけ宗のとく本多の始  
祖ともへ天台宗。法花宗。是も鶴林樹善薩宗のと達。唐至  
ハ小齊の惠文皇帝ハ中代桓武帝の延廣年中。最澄入  
唐して宗のと傳り。鶴林の後ヒ叢山以開て賜。祖也。是  
△玄空宗。瑜伽宗又。星も龍樹大士。南天竺の説者  
菩薩と祖と。不空金剛密嚴と。是也。唐去小渡。唐去  
一江の閻梨。日本ハ桓武帝の延廣年中。空海入唐。そ宗門  
と傳來し。金剛密嚴も法國で始祖と。華嚴宗。是も説  
樹より出。唐去ハ經南山の帝心寺師日本。興福もの慈利僧  
都と祖と。△唯識宗。法相宗。松葉より算り。一世親善薩小  
出。戒賢律師。法祖と。唐の玄奘。慈月日本ハ二十代舒明  
帝の約を。宋渡り。南都興福もの道昭和尚と始祖と。是  
凡日本に宗廟の渡り。是と始祖とへ俱含宗起五

唯識宗の開祖。但唐玄奘で道宣律師と祖と。日本  
五、六論宗の諸師玄昉等を祖とへ法華宗。教皇  
より十九祖鳩摩羅多等者の傳承後聲之義と祖と  
す。唐玄奘も楊立も義長也。日本五、六祖。伏明  
帝の和親三年。玄門渡り。二論宗の諸師兼学す  
也。一家に小立也。以とと八宗と云。但今續る事無  
き。△淨土宗。祐善の後世觀音菩薩より出。義理源丈之  
義と祖と。唐玄奘。慧顥。道綽。善導大師曰。大  
法強と人と祖と。八十四代煥神帝の建暦二年入寂す  
も。追號謚号と賜ひ。また文化年中六百年前後  
圓光東漸。惠感。寛大師と称せ。△禪宗。弘忍。釋慧能  
。六祖。達磨も者と祖と。唐玄奘。二祖惠可大師。う  
六祖惠能大師を傳へ。是を諸師と云。日本五、六代  
鈞明帝の幼少歿り。六十二代達摩帝の幼少も歿り。う  
御まごりしに。八十三代後。弘曉の幼少。唐玄奘の道隆也。あ  
日本。通元深師。入唐して主一とはしままで。元。般若

王永平も法圓也。東家とては隠れ教の全體を嫌  
食ふ達長も法圓也。西家法圓も是より大約是曹洞  
源流の諸派也。八宗小淨淳友法加十宗と之へ一向宗  
法種と人の才子觀響小今して。東家徒生の一派と云  
トあら便しより。觀響と人一宗の組として。もく者四  
家焉と云法とく。圓纏の正統、觀響の女覺伝尼より。  
如經と人と相善。如妙と人の矛盾より。本願も二家け  
小別毛教頃教如上人と東の組として。次男准如と今家  
本願も法續で稱と称也。又身田無事は先ちの法派  
也。時宋<sub>華嚴派</sub>一遍と人起立の一派。後法華宗通  
場と設諸召と遊行してれども。身子純阿彌陀  
縷<sub>ト</sub>け富法圓<sub>ト</sub>一遍<sub>ト</sub>。遍體本文の宣歎小通教<sub>ト</sub>七五  
四向の偈と感得せり。小、事名等一遍法<sub>ト</sub>十界<sub>ト</sub>一  
遍体。又以難念一遍禮。人中<sub>ト</sub>より妙好華と云。四向  
の上の家と云ひ。十万人<sub>ト</sub>是也。年万人決定徒生  
と書ふ。されども遊行勸化をとくや。日蓮家<sub>ト</sub>經量

日蓮聖人曰。かくて起立の一室へ。八十六代後源草院  
建長六年第てと家の題曰代惣。千辛萬苦以纏て  
家の終ふ漏布せり。六老僧中老十人の中也。日朗師  
の子。十九老の猪師。小孟て追く猪派と別ら。後又久  
遠院日親大不當つと慶ゆ。も。狼狽宗祖ふ等  
一派の祖也。付門と云△黄檗宗。禪宗の一派也。  
大明の二十世。由柳の永脣八年。本朝。後光明帝の

嘉應三年。隱元深師曰。本小乘。藏洲宣詔。本真麿  
と対た。日本かで。ちる骨と。毛りし木庵等。續て唱一聲。  
以上八宗十宗。内小非也。於て宗外と称を

○日の吉凶と撰む心得の事

農家の日の吉凶。試唱。天大日。地太日。水。火。土。金。木。  
二隣。亡。小縄。結。解。せき。よど。人の忌。と。歲。け除。は。し。  
薺。笠。長。齋。の願。日。れ。若。惠。の事。あ。み。統。か。日。六。干。  
支配。余。の。か。よ。出。も。一。定。の。う。そ。毎。年。始。り。

天文曆教ふ。朝の如かく。醫事の事。洞に運氣論。  
荀て一年の季暖風氣。宿有時。候の遲速。以考る  
法也。是聖賢千支の病と說の將か。後遺家陰陽  
家より。種との日は余ト。若無以定め。居が必用也。  
鳥鳴煙火。右毛モ出さり。たゞひ天赦の吉日アリ也。  
大同暴氣かどあり。惡日。或暦日滅門日たりとも。  
日月清明。ふ辭す。まほ。天熟日。受北日。日  
小生々人あり。血をとて。薦。送る。是。業。十食玉太  
より下界少降て。食が未。神あり。十方善明て。天一神  
の天。上。もと。云。小鬼も。あま。へ。武士主食。あ  
俄。少旅へ。主ん。今日。往。亡日。明日。ト。下されど。  
鬼門の方。カ。系。カ。ト。云。是。は。神。日。左。也。源。ト。達  
ハ。礙。カ。ト。云。我。事。カ。て。神。ト。定。カ。ト。壁。ハ。主。神。隣。の  
あ。カ。ト。東。ト。多。壁。本。來。主。東。神。ト。佛。氏。ト。接  
云。ある。也。故。日。月。の。食。ある。日。毒。氣。津。よ。右。井。靈。震。  
か。ど。古。風。の。主。聖。人。ハ。設。源。ハ。也。迅。雷。風。烈。也。

積々へ。食も天變とて懼り。至重六定の數を食  
はき。毎月初日小一月用通と同し。日ひるく月へ少  
量。通南山の度と一つ小さな時食とかか。小日食、細目  
小限。トから同よも見と隔たり。かくて、やれど。  
實小日、半瓶之十四六日の間小滿月を。日、塘ト入  
きとも地の新葉射く。け新葉つるく思ふと毎日  
かゆとも。極めて多く。月は化新の闇虚か  
入時食も。十四六日満月の時小限。月、日の光を  
更え。考らるるか。小地の新の闇小入。日の光と更え  
かうまきけ闇る。まか害小入。強モ虧害。日も  
離れて地より見えぬ。け理ハ天常とせられ。至渴  
一絆。日同の陰小皆既と云。まかつてと刻て十分の  
食ふ云々。曆教と推時ハ十年先の食も測かる。虧  
程省ての故く。け日減吉日とも悪日とも。定ぐれどと  
かきとも。每小害ると有日をま。除るも可く。又曆  
代操人中陰のみ。向ぬもあり。毎日の之れと紀あれ。

聖人きよしにんは本性ほんじやうの人は中陰なかいんの死死が火ひと水みずから、吉よし全ぜんう  
去さるゆく。凶けいは第一小論いにしうんをくわいの生なまれと死死と捐すまつてゆく。  
ハ誤あやまきり、重おも日復かえ日ひへうききをも。ふくひの初はじ日ひへ賜たま姻いん  
葬くわ送くわかとふかい忌いみとも外ほかの吉事よしか、却むかて吉日よしへ賜たま給くわ  
安やすて日ひ以よ後ご活用かくようと死死し。乃の生なまれの委曲いきょく、恩おんが  
著あらわしのる。法書ほうしょ示蒙鈔しめいしやう近ちかく發版はつばんを。地圖ぢず、  
地圖ぢずの寫うり。

○夜半よま以よて昨今さきこのの界さへとす。

屬しゆ三さん刻こく百ひゃく刻こくと十二じゅうに時じ小こ別べつ也や。一いち時じ小こ八は刻こく二十三にじゅうさん分ぶん。

二十じゅう分ぶん少すくなつ。時の鐘とがねを鼓たた時じ計けいかど、至いた刻こく十二じゅうに時じ百ひゃく十じゅう分ぶん少すくなつ。一いち時じ十じゅう分ぶん少すくなつ。是これと一ひととし。至いた一分いふんと一ひとすと移いは。屬しゆの午ご時じに刻こく十六じゅうろく分ぶん餘よの處ところ。晝あたの九くわ時じ鼓たためめ、屬しゆと鐘とがねと  
もいつも半はん時じのを過くわり。辰たつ未み子この四よ刻こく十六じゅうろく分ぶん餘よのま  
で辰たつ未みの九くわ時じ鼓たためめ。昨日きのよと今日きのうの界さへと辰たつ未みの九くわ時じ  
の後のち。今いま曉あさたた半はん七しち時じ。明あけ六ろく時じ今いま朝あさと云い。是これ  
後のち、屬しゆ小こ今いま未みの三さん刻こくと半はん七しち時じ。未みの日ひの未みと  
半はん七しち時じ。達たつの方ほうと云い。是これ未み時じ守まつと半はん七しち時じ。

續の方ふ。今秋子と云ひては今暁す。蟹、牛  
の八刻と用ふ入とあく。達也へちかく之をもと  
まし。日辰未の八刻とあく。達也へ時守と之。  
節や中八刻もかけむ。但月極をう。明六半時を  
今朝のちと之月のちと。朝と十もふほしものと思ふ著  
外鼓脣合刻一枚。世宗の御脣と達と刻と合ひて之

略日時計。潮汐の盈虚と圓缺をもる事  
左の図を掌て極其漫率に画して正中一寸余りのねぶ達

但竹と細くはらず。手  
長さよき。南北下へ居計

の絵のことを知て

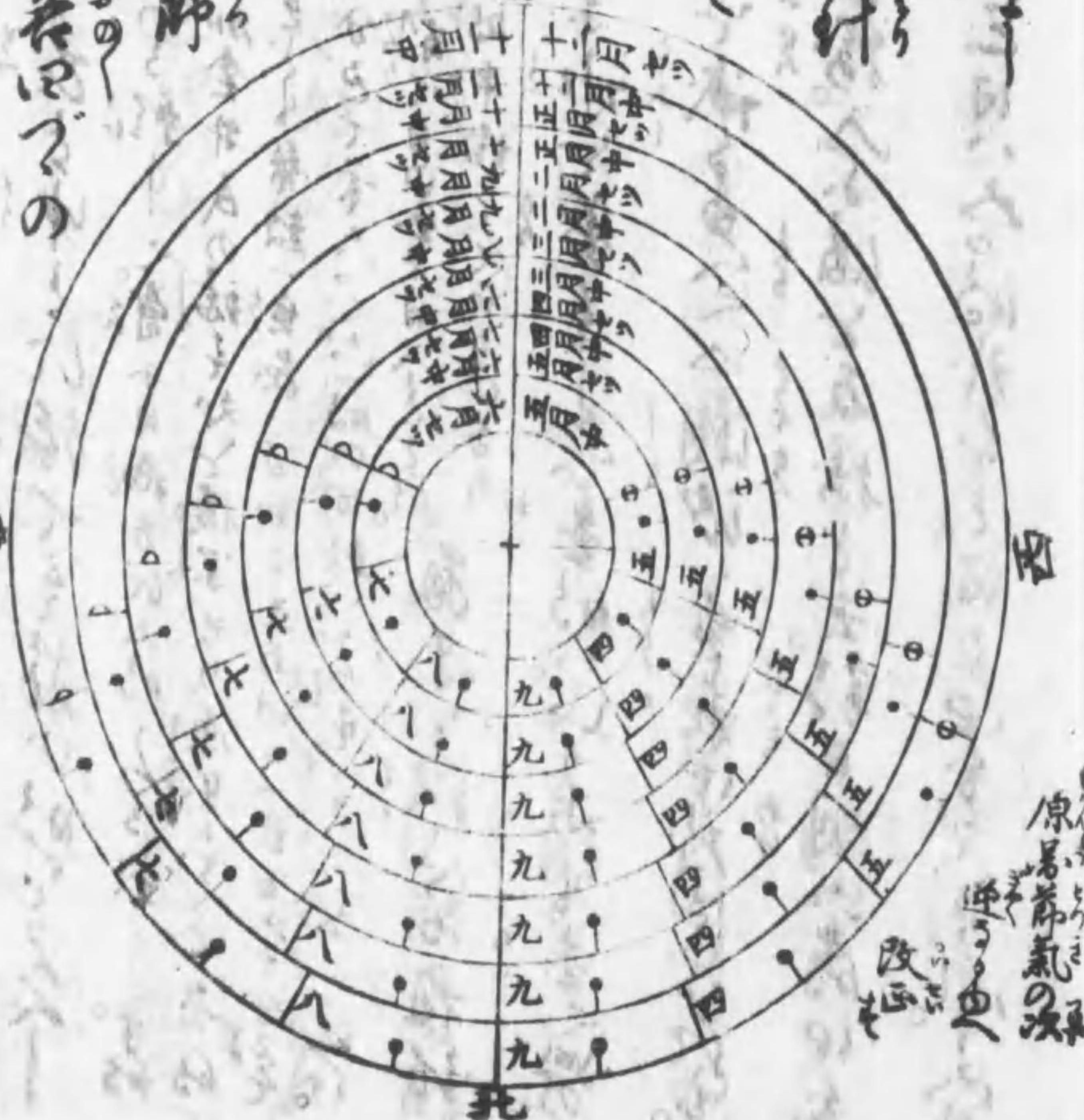
ぬとか十月の

中と十二月の辰

と同じく。又月

の仲と六月の節

と同す。至間の名はづの



元氣と合を。毛衣と中とし。宿て。至筋の時と。今  
旭日。東方から。うら野中。小日向方に。入ぬ。うら野中。ま  
く。くじ島。水たの加金井氏の船を。知と。操軍あり。原島。まく。六角的  
より。二局もあり。操も。も。勝敗。一。船一万艘と。主。あけ。高船。半分を。そ  
れ出。又。日。入て。北面六十艘と。主。六角。六角の。日。船。も。も。と。か。  
日。船。も。と。か。船。也。像て。今。前。日。の。日。日。日。入。と。と。  
船。也。百。の。数。ハ。日。平均。して。えり。の。き。 漢。漢。と。う。植。植  
船。也。百。の。数。ハ。日。平均。して。えり。の。き。 漢。漢。と。う。植。植

車に。乗。よ。四。小。水。と。堅。毛。と。重。的。い。ふ。も。走。の

毛。と。ひ。く。不。平。と。試。毛。く。△。湖。波。は。空。景。望。に。見。る。

月。の。空。波。と。重。入。不。波。と。重。持。と。云。毎。日。明。空。が。重。る。

二。月。七。時。八。毛。三。月。八。六。時。毛。も。と。日。て。空。も。あ。され。牛。八

小。船。八。時。十六。日。船。八。時。空。毛。也。絶。日。と。同。一。と。毛。

明。と。晉。と。遠。ふ。毛。之。晦。日。八。八。日。不。同。毛。と。波。の。光。ば。云

毛。の。空。毛。是。毛。う。二。時。の。同。波。」晦。日。午。日。は。明。と。時。

正。月。の。波。結。毛。く。二。時。色。毛。う。時。う。干。洁。又。二。時。の。空。に

和。大。時。う。正。月。の。波。結。史。一。時。の。写。」和。大。時。

が。干。洁。う。固。て。波。波。と。揉。捷。往。」二。日。却。ふ。波。も。され

の。波。波。毛。小。空。二。日。の。十二。と。で。夕。の。空。も。う。絶。日。の。波。也。

十。波。展。と。二。と。歌。も。と。ひ。ゆ。二。日。波。の。底。毛。三十。か。底。已。年。

とこの時も。いつもの通り。前日と十六日。二日と十七日同ト。ことゆえ。  
十六日ま、あのとく様。十八日から、六七八と云々を  
十六日と前日かあるゆく。この日の十二とて。十首也。函。う  
そばとさへ。二日と。この。十八とて。十首也。函。う  
うそば十八。成六。武も。やり三十から。成。文字と。應  
胡のふつから。皆も。ふつかひどく。十八日も。と。十首也。  
と。月が先と。書が先と。遠く。御。うそば。函。うそば。三列で  
擇あり。歲日も。よほはま。と。東。むかし。組。世。竹。も。あ  
量と。多。い。主。幕。傍。字。用。は。是。も。室。幕。は。長。姫。も。月。の

大小。推平均云。年之小の月。秋九日。冬四日。俄。八分  
後。謂。年。脣。數。之。推。之。一。月。の。歟。一。定。か。れ。  
かく。數。も。日。と。是。も。本。中。主。日。限。と。算。せ。ま。れ。ま。  
の。割。清。に。し。ま。と。じ。だ。よ。へ。縁。て。ほ。ち。あ。く。と  
大。教。と。立。て。用。は。無。ど。く。又。主。北。海。の。勢。ひ。る。海。  
湖。汐。時。小。食。る。海。も。主。事。一。是。ハ。主。北。海。小。列。て。羣  
種。と。是。る。なり。

土地田畠が附する農家八軒の文字

八池 石地 碑 市場 論所 植園 烟島 東  
木林 高端 場諸 彩蟹 未耕 場庭 壇壇 本田  
處死 來居 小居 封疆 去堤 大場 泥地 畔泊 攝街  
衢巷 捷徑 町方 加行 順加 廣內 金馬 講鄉 沿垂  
周阜 清湯 渡還 海道 街道 川堀 川原 河岸 附  
渴水 根澤 仁村 茶山 承屋 回舍 淡野 肥田 用  
漢池 滴漏 田畠 破缺 破缺 売場 蓮鷺 隊森 田  
塊疊 墓塚 田中 田中 墓塚 十字街 付宿 庭甸

相槿 車貞 地 助殿 南代 乃子 生光 君頬 耕地  
轄地 村鄰 美膳 送食 深淵 眼畠 畦畠 窠窩 深潔  
煙種 野莖 陞迫 郊原 莘塍 圓邦 邦川 深石  
隈水 灘陸 公席 稲玉 畔叢 遠路 室地 墓塚  
泥流 岬 曙光 荒壁 山決 破瀉 山源 窪間 九折  
松東 莖木 濟阻 藤 潤泥 朱澤 司惠 同品 優  
射湖 有樹丘 溪小浦 菴去苴臺 攝瀆 清水

洪波 沙料 破石 棱薩 古墳 古田 隆田 江支川  
田地 田畑 出水 綱代木 潤冰 墓縣 荒地 旌疇  
軒轅 萬田 一禽 田二野 田三鳥之里墓山田 七聖土 宿穴  
小石 細石 磷石 陽沃 陰沃 东澤坂 陰宋地 東苑  
鄉里 界隈境疆 他先雲母岸崖給化 紹而  
高遠 幽谷 名跡頗峯 参岬 海山 潮冰 九岬  
汀湊 清瀬 水元 源道 通路 途莊園 佐領  
作腹 ち腹 久領 島測 温地 陰津 野通 蛇蕪

城下 牛田流作湯 天領城址 芝地 富湯 極口 森  
杜漚 圓所 漱下野玉瀬 测峰 及別町 反  
面先 觀三十步 一坪 產邑 產邑  
換毛 上中下田 下見毛孫 檢見合附 併刈 定光  
破高光 先 垣附 去出 皆漏 納过 上納 乞等  
ト の家より

醫師へ遣毛筋幹書入用の文字  
几帳と拂、聖人の教ゆく。医三世から源、多喜美術館

せまとい。一代の医は、死刑小懲りもと覺ゆかく。或  
もお侍の内や、私見しよあじゆく良方といふべ  
やへども。現候ものい。子先を茶と嘗て、後醍醐が御  
化人や。在はへ者ト伍きと聖人の戒を奉取せらる  
所。故に、室うちれ絶縁の序。小盤毛一筋かどひを  
うり手裏の襟をとと。又脈へ生ふて薬をす。此  
穀もあき。一オの生死と人ふ要する。種々ざる  
事とゆ。折の疾やも庸医の薦用べづば。多方も

述もふ自由ある處多し。氣小功者の医と訊きく。  
痛用小充へう。病人の密體とよまぬかはと  
ふく云述。種忽て遠方の医、恩怨もをたりの前。  
日この松林。食物の多少。二段の通考。日帳  
をとし總主。某え小物せきべ。取れ林業、僕家事  
事も独立し。通考へ食物の禁物試尋まく。小  
と酒用刑かく。互通するもせり。病有乃丈事  
菟榜左小識

久歇  
齧 疼 悪瘡 痛 息切 息迫 心喘 麻痺 劳  
頂缺脣 瘰 胃發癢 红眼 腋窩 遺尿 連搘 陰莖  
陸囊 淫門 流虛火動 痰火 淤血 離別 附腫  
牙宣 咬齒 切齒頭顱 鼻 人中 鮎 毓鈞鰐 肌  
膚 腹 脣後 腹陽 機 機陰 膜 滑 滑膚 事  
半額 月代 放屁 治 紙陰 肺癆 烏白羊 丹道瘡  
睡 犀角 破傷風 破脾風 小兒 麻疹 天河水 特瘡  
胞瘡 發表 發散 房事 脊腰瘡 圓周脫風 痘瘍

二腕 面皰 乳岩 乳瘡 乳癰 女根 骨 接骨 離子  
頰 頰鱗 脣臍 脣常 肚 小腹 腸 納漏 煙燭 離  
熱 發斑 發瘡 小云 奎脈 血塊 相胃 骨 結毒  
浦茶 刺 神本復平瘡 平瘡 安舌指 療瘡 毒瘡 放  
毒瘡 侵濁 侵血 虛耗 安志 腸 腸試 腸瘡 離波  
雞癰 眼雀盲 會陰 上連 以乳 吐血 動氣 眼瘡 刺  
穴小經痛 乳孔 同篇 血 血射 血止 血流 血痕  
形氣 血瘡 血狂 捷 缓弱 乳首 乳房 乳汁  
濕瘡

乳味 嘴上 力痛 手指 中晚冲 冲肉 中风 中邪  
中暑 中湿 中寒 近眼 趁波 长登 长病 拍  
拍手 痢疾 行 痘痘 痘漏 重舌 重病 拍  
敷 敷的 淋病 淋腰 刺病 痛寒 痛寒 痛漏 重舌 重病  
流吹 流走 腰痛 颈中风 颈皮病 颈皮病  
爱气 恶气 恶阻 恶露 面竹 面竹 颤 颤  
虚烦 梅眩 眩晕 血晕 血晕 血晕 血晕 血晕  
宿 痘 痘 小儿 鬼 鬼 滴丸 脑 脑 脑 脑 脑  
螺壳 客忤 小儿 鬼 鬼 滴丸 脑 脑 脑 脑 脑

胡臭 孤臭 黄疸 黄膀 黄疸 黄常 京 烦虚脚 楼凳  
楼凳 犬胫 肢形像 寒 魂 ほほ 髪 光影 影色  
眼痛 眼中 眇 眇 肩颈 统筋 遍 支離 小兒胎裏  
痛 呕逆 消渴 喷嗽 嘎氣 脚氣 痰 痰 痰 痰  
口瘡 痘症 痘痕 痘症 痘症 痘症 痘症 痘症  
筋乾 干渴 血塊 痹 痹 痹 痹 痹 痹 痹  
手足 肝膽刺痛 痞邪 痞熱 痞 憔悴 憔悴 憔悴 憔悴  
寒脉 痞脉 脾泄 夜啼 模寢 俊毒 離 離

痘生 壽太 骨魂性 驚髓 内田 數舉 骨掌 脣  
 痘毒 膜癰 热而瘦 疼亂 疼喉 疼積 疼血 疼涼 疼痛  
 脫肛 痢將 肝腎對口瘡 累多患 腹股風 急燒 大腿  
 大腸 大便 帶糞 亢熱 大燭 開鍼 以末同 治加 看病  
 分抱 除法 癒表 瘰節風 編指 背 開而 蔽手鍼 滾  
 肉癰 肉肉利 平中風 走陽 男子女小丈女走牙  
 外課 陰風 既痛 旋毛風 凡風既風拔 代指  
 肝風 暢骨 痛通 通氣 二般 痛 痛風 鬼症 蕁肺  
 同冰 燥熱 痘也 透赤 眼 痘冷 盗汗 熱氣 熱病  
 葩 根 痘也 透歸風 内多口 魏容熱 驚蟹 腦胞  
 痘 天疽 淤生風 生厭 將瘡 痘毛 男根 游痘 瘰病  
 痘瘡 痘治 痘瘡 痘瘡 痘瘡 痘瘡 痘瘡  
 肉瘡 肉攻 肉換 肉勞 痘瘡 赤痒 痘瘡 痘瘡  
 痘瘡 淤食 痘瘡 老衰 老耄 痘瘡 痘瘡  
 痘瘡 亂氣 亂毛 痘瘡 痘瘡 痘瘡 痘瘡  
 勢截 男根 痘瘡 板瘡 痘瘡 蒸齒 蒸齒 腺瘤  
 痘瘡 痘瘡 痘瘡 痘瘡 痘瘡 痘瘡 痘瘡

心動 息艸 胸悶 胃脘痛 嘔 暢嚮 頭暬 忽忘 吐衄  
吐衄 咳 滴拗 是 枝指 云 小脣骨 虛濶 混濁 脱氣  
脫指 痘遠 天支 頂 脍盤 腺 外瘡 表皮 腕 跟膝  
膏沃 于 腫十 熱 緋熱 不飽 淚瘡 循塗 痘 痘風  
鬱氣 皰熱 脊症 痘疫 陰瘡 漏瘡 噴瘡 丹毒  
擗風 圓瘡 吻 盡 游瘡 痘瘡 漏瘡 噴瘡 擗傷  
懷胎 刺痛 深刺 深瘡 瘰乳 鵝膝風 缸風 術 丹毒  
腰痺 滴打 茎痛 眼外 痘 热眼 通視 蟹 瘰  
瘡瘍 湯大傷 瘰 水痘 養生 瘰瘍 瘰瘍 瘰  
疾癩 痘 痘 痘 痘 痘 痘 痘 痘 痘 痘 瘰  
腰痺 麻木 慢營風 瘰瘍 肉利 毛孔 元氣 血氣  
血瘍 血塊 血淋 血瘀 血毛 經絡 經固 經冰  
月經 經行 下乳 下焦 下血 下疳 瘰瘍 瘰  
赤氣 痘 痘 痘 痘 痘 痘 痘 痘 痘 痘 瘰

下星二 消食 塞 腹痛 腹肉 痛中 胖病 酸  
人病 血瘀 风市 穴 风邪 风眼 风毒 阴骨疽 肿  
腰痛 膝痛 颈痛 治痛 源手 痛处 腹胀 未食  
不通 不收 陰囊 吸吸 欧冷 横 横是 骨肉 骨蒸  
腰肥 肾虚 脾虚 肝门 丹田 丹热 焦古 黑带 紫带 小用  
鼓胀 痉挛 肠六腑 六腑 肠衣 瘦弱  
腰痛 天枢 顎痛 山楂 肉钩 丹参 丹参  
天枢 顎痛 山楂 肉钩 丹参 丹参  
腰痛 天枢 顎痛 山楂 肉钩 丹参 丹参

停泻 食物 天窓 青盲 赤脈 眼助 腕穴 窓 孔毛  
寒汗 短伸 嘴 脍 咳 壓 菊石 足 脚毛  
漏泄 腹痛 痘 疮瘍 赤箭 眼助 腕穴 窓 孔毛  
厥風 摧之 小兒 痘 疮瘍 赤箭 眼助 腕穴 窓 孔毛  
三病 常嘔 搌瘍 泡泻 呕吐 中暑  
寒感 倒產 腸 密理 鸭尾 肝 腮 肌骨 手足  
胃膈 雜丸 食 食熱 多次 禁食穴 亂毒 風

力 氣分 氣分 血氣 脈搏 氣方 審視 面色  
麻息 刺痛 痛刺 胸痛 胃痛 腹痛 腹脹  
虛刺 虛眼 忽視 患忘 患所 疾疫 連卦  
魚口瘡 便毒 瘰疬 狂氣 癔症 金創 九死一生 執  
瘻瘍 眼暎 眼睛 耳聾 聰耳 清濁 甘草  
耳門 耳垂珠 珠 珠頭 珠頭 舌頭 珠頭  
腰 痘瘍 細胞 痘瘍 腹脹 腹脹 皮膚  
肛門 結廯 白廯 疥癬 白廯 白廯 白廯  
鬚瘡 深時瘧中 時瘧 傷風 傷寒 濟陰  
自汗 酒氣 麻木 濕脾 濕寒 濕氣 潤形  
食傷 食溼 呪 吞 食冷 溼寒 潤形  
腫脹 瞳子 瞳子 食指 肺皮膚 皮肉肚  
膝蓋 膜液 肥液 肥氣 小云 秘結 滑皮膚

腰  
胃風 捕胃虛 拘攣 筋痙攣 搞搥 冷汗 白  
癲 百合病 (百合) 痛才 痛脳 痛脣 痛心 痛強  
痛根 必死 頻數 小目 双手 股 髋脹 間絃 緊張  
火熱物 懈 細索 倫計眼 精神 精力 精根 精血  
背 脊 痘癰 嘴息 嘴脹 嘴氣 嘴橫 消渴  
石淋 小便 小腸 小便 小便 小便 彼膚而終食姿  
髓筋 眼 腸 水腫 水腫 醬醋 苦口 宿疾  
以上支神病名等の文字を更て書解ふ。配列

加減冷脈。丸散丹圓。諸葉。藥葉。林葉。本道外科  
眼科。角膜。膏葉。貼葉。洗葉。搖葉。と用ひ。毒引患  
也。按摩導引針治。各法の手筋。全般手筋。大切小  
如。如。如。如。如。

### 諸院又一札之本文

諸院宿詔町場。至去地繁昌。貨地實店。家事。宅  
建。繕。都下町並の。して。宿。支。諸。清。建。又。經。業。文  
も。大概。試。序。小。出。も

店清抄本

一 は誰とす者。生因社奉達麻者付。被者店清。お主

を處の店偶文若事。处置心也。店資。麻。是ノ月

金錢の程究。毎月晦日支度を掲出す。義相満り。

銀錢の程究。毎月晦日支度を掲出す。義相満り。

物名より史の程歟。多動定。致ひ先店の角も多。

物の時。古事記。為明源。必用。或。方。引。事。山。

物の時。古事記。為明源。必用。或。方。引。事。山。

物の時。古事記。為明源。必用。或。方。引。事。山。

物の時。古事記。為明源。必用。或。方。引。事。山。

物の時。古事記。為明源。必用。或。方。引。事。山。

物の時。古事記。為明源。必用。或。方。引。事。山。

年号月日

高文人 雜下

數題

唐詩

雜作

地文狀之事

まえ  
一は誰もり者。まよ被衣被髮者。付。被衣被髮者。今  
おとま風。少地面。山表平。の程。裏平。の程。左合。右  
の峰。坡。湍。流。自。多。化。捨。吾。まよ。事。西。北。代。流。  
至。向。全。仰。程。跑。拉。定。七月。生。多。仰。程。十。月。善。仰。程。

三五

毎年二季。患。發。為。產。出。ア。シ。美。如。第。レ。ノ。の。程。感。覺。  
株。名。ア。文。シ。勤。定。ア。枝。シ。也。花。面。シ。用。シ。所。シ。の。備。  
ラ。底。敷。能。ア。拂。布。面。シ。能。先。株。名。方。門。立。  
為。謂。滅。ア。以。  
ト。シ。き。シ。モ。シ。も。ト。の。さ。ハ。大。熟。  
一。卉。之。儀。樣。拂。流。度。休。多。不。及。上。痛。並。シ。他。法。  
空。為。右。肩。カ。リ。寫。上。氣。小。妙。也。觀。於。之。大。風。也。多。動。  
为。岐。山。高。而。多。以。  
宗。高。古。代。之。何。宋。高。而。高。院。櫻。那。經。高。處。

表事法度を定め様にて者の方より易くの方と  
往出を許す。被ては、承内通人金持才林役院に候  
事人。南時久人。立候。

右事通地更人。無事り上至。想る如様も。先發如入等  
出来候。端度極志方。小文書度。宿明。未候。トが爲  
若事。お掛り。お見は。為。美日坊。傳花文。如解

信寫物附

年写月日

地保主

地保人

年写

月写

右文院の内。浪人。差遣する。又。旅泊を乞う。通掛  
を。仰げ。沙門。義。義。沙門。も。ど。の。義。源。今。う。セ  
や。不。うち。か。一。の。達。が。ま。と。ま。く。の。人。連。名  
を。も。年。号。月。日。將。不。出。名。の。よ。ふ。書。べ。一。連。名。の  
あ。中。へ。ま。い。あ。

本質税文。ハ。委。法。税。文。と。相。と。年。家。本。事。と。云。之  
以。出。又。借用。元利。勘定。支。済。よ。本。事。達。ア。本。事。

一札と五ヶ月せふむるなり。京本賣渡邊文正の事も  
清かく。丸かくせ一札好。またかく。左方主。農民の  
家屋敷。水代賣とす。多法友々。核年季の理文  
ふく流傳小識。江戸の町かとみて。水代賣は。左  
屋敷。事と認るよ。且又田畠質入達文も。大方は

知ばかり。お編下

核年季賣渡一左屋敷の事

一の町の町目。例。田食。の間。奥河の間。裏幅の間。有。松吉

不持。左屋敷。け。度。代金。如。主。左屋方。核年。の間。  
黄波則。名。主。人。組。主。合。右。金子。姓。清。九。父。事。之。  
ふす。

左屋敷付

却領主様。多様。度。主。度。主。度。主。度。主。度。主。  
車。書。入。ふ。く。後。度。主。度。主。度。主。度。主。度。主。  
遠乳。右。皆。事。度。主。度。主。度。主。度。主。度。主。度。主。  
者。主。度。主。度。主。度。主。度。主。度。主。度。主。度。主。度。主。  
の。度。日。拾。車。事。賣。券。狀。如。件。

年号月日

嘉慶癸未年正月

詔下

詔下

日

詔及

詔及  
大名村組の利と役をやむ如き、小村等を名の  
加平く役平を以て役文。後日の役期を度して之を役  
と書也。捨て年賃入と取廻し、年と書。又役も捨て年  
と書。役文は賃へ割合を以て組年食。亦金子撫清と書。終の

詔及  
年賃入と賃入役文と書也

家守更替之事

一  
詔及  
者越滅者付  
拂去事清人、かまひ候ひ不持  
而高仰町例表間に田舎の間裏行の写裏幅の写  
有じ家屋敷家ある城内不寛ひ、代店續し候也。  
高仰町役諸入用、高き給金事作蓄事外、入用もと  
在誰方らより支拂。至り候金物の積度毎日晦日  
乃相候事。在某日何の月と都ちる役は某事候也。

御用。此の事に在る處を取捕。まつては、内に清河。一ノ山。初福  
朝日。不東。ひき。時代店。賃。月。内成。お満山。い。家守  
おとと。り。時。放。不。見。加。ひ。時。取。大。不。居。ま。内。声。宿。軍。山。一  
類。燒。あ。候。有。以。先。時代店。賃。在。持。通。守。不。遠

為。持。出。軍。山。

御。公。儀。様。御。法。度。不。廢。左。切。あ。る。諸。多。福。事。多。油。飴。  
唐。扇。不。有。周。扇。役。町。役。左。切。あ。れ。動。軍。不。店。荒。店。文  
物。奇。多。形。ホ。金。集。め。た。墨。不。見。面。者。為。表。軍。不。宣。裏。

一。宗。高。主。代。御。御。家。ホ。而。御。村。御。奇。櫻。那。御。安。シ。往。  
御。安。室。の。林。ト。リ。翁。ツ。度。ヒ。之。櫻。高。御。方。主。度。登。

急。が。リ。被。不。往。

右。之。通。家。也。遣。之。急。之。之。鳥。も。の。底。上。之。故。出。入。不。坡。  
出。朱。以。火。松。名。高。之。急。急。家。時。之。度。ヒ。少。後。四。若。勞  
事。然。ノ。間。未。以。火。後。日。家。守。清。院。又。別。件。

年。号。月。日。

桂人。六人。如。

四。誰。下。

誰。下。

和守  
雜下

入金事一札之事

此度支度合金利の積滞用立年割利起る。某  
何年何月元利を返り返済の約束も名を組合委  
員と有し金子を返り以て元利を済みと同月度合  
金子を返す。某の町外側の間を取扱ひ業者と  
モ何時何處の間に取扱ひ業者とある。

在金子お歎き事。何物も有れ在金子が度合年割  
候迄一札拵

奉書月日

摺印  
和守  
雜下

宛名

養子表女娘と化材へ連。又化材を取る所を役人より  
連絡の一札拵めし。今何入金子を度合年割を通  
道一札

拙者村内百姓誰娘の村誰及勝る。少村方御飯事無  
誰及妻。縁組於熟達。山登み引移。人傳て為村  
人別お除り名。向後少村方少剣士入不見り。又多  
音ひ止度以止

年号月日

何之誰麻沙松  
物取何村  
四名主中

落葉一札

村方少百姓誰及勝利。少村方御飯事。誰及勝る。少村方御飯事  
舞處子。縁組於熟達。山登み引移。人傳て為村  
人別お除り名。向後少村方少剣士入不見り。又多  
音ひ止度以止

年号月日

何之誰麻沙松  
物取何村  
四名主中

何之誰支配不  
物取何村  
四名主中

誰

性一も成浦での送添事ハ勿も通じし方、向處  
内々へ取手ぞよ。一村の内そも。併し此遣事。一れまか  
る事も、村長手をよ。

離別物ハ妻あくも夫あくも。又限同居と隨も短く書  
てよ。この事と云ふは、必ず離合相思之志故に附  
書ふ事なりと考へる。間違之元本よろしく御學  
め。定法もなし。往來書と至る處

### 離縁一札

主元事不熟、付離縁。後の方と續付  
差株せし。爲後日一札奉呈。

何ノ何日月

離縁

これども

喧嘩は漏多級少て肉派の一札奉文の如ゆき也

為主者一札奉事

正月歳旦終ち事多忙。此村離縁碑社によ  
藤村離縁も及ばぬ。まつ度の子息、酒食の上へ政方

事。此以宥ひと不當用から及思に割移移と以承付候  
事。既に事極を好ひ而人役共一矢書一決了し。今支  
持往海恐入佐喜在村奉向アリ。然如譲付諸  
西村諸方取扱不當草山附一同承事。候。候。候。候。候。  
此種未入用金の數。誰方ト為事。以むは後處五  
禁酒。為ば否。純。空。少。取。取。取。取。取。  
ぬ。一札加件

奉馬月日

傳

维

組合

義人

門

维  
下

碧  
维

内済一札之事

西月城日清多シ事。諸友津村准子。及  
は論。以。片。維。立。入。山。角。事。近。東。連。片。と。書。九。  
惠。以。上。多。取。與。山。路。東。酒。社。之。多。主。多。種。多。

在此次算中多事檢討不無曲折。惟以版印為取向。  
之後便無怠懈。在版不為營利代金之本意也。而  
以後也未嘗忘省。至是又。仰商之世緣。隨事奉候。  
亦復同一札如神。

留  
宿  
惟  
午

宛  
所  
連  
名

健  
一  
札

先此謹奉相撲恩賜。及以余中耕。入人遠。而未及  
及打擲。既一云。而終未竟。更誤公。全以對處。當  
忘恨。寧知。此。良。固。道。以。維。役。仰。渴。市。急。資。信。  
後。於。人。前。方。社。序。除。付。私。念。付。私。念。惟。之。好。  
人。遠。未。急。忽。之。也。而。同。次。算。底。之。以。後。急。安。  
打。擲。而。以。在。此。算。多。收。多。之。之。之。打。擲。而。多。  
經。打。之。誠。而。惑。休。之。之。少。勤。無。之。之。打。擲。而。之。之。  
年。希。以。唯。及。之。及。付。院。一。札。多。而。如。仍。如。神。

年号月日

准下

准版

凡記文の事小如件と云件と、傳教とちつ差え。字形  
も人情傍小牛のり人と牛と混難せとも。大自らも  
之へ一考文輕易輕率編みも多き也。見合へ。  
仍其神と事と無別く如くおもね漫目をも書て乃と、重云之。仍の  
字形に方より仍かと自相違くおもね如件とあら、傍考の當國直  
面的、又後の書つて、  
仍の字形用也實も異なり。

同用相場單割引

○金主ぬ付議と裏八百文替て。銀主ぬの議行程と如は。  
六百八百文と金圓引。但四十九十下りて八二十引  
六指引。割て百八文八分圓引足一一百指引又八分と  
如は定法。又某事八百文と金主下りて八十九十引  
同と見て如て割て百八文八百文下の物とあら、八百八百文八分  
ウ代うけ。又十九と某事百文下の圓引足  
○銀武朱小判八百足八文替て。銀主ぬのは行程空  
知八百四指八文と金圓引。八百指文引八百指文引八百指文引

百八文ひゃくはちもん。圓法四丈是更無印又またと知しハ定法也じょうほうや  
△△正義じょうぎハ百丈八文ひゃくじょうはちもんハ正法也じょうほうや。小割挂文こわりつけもん  
墨すみの印いんと引ひき面おもて挂文こわりつけもんと知し。とがまち御座ござ不生  
なれなれとも通用うゆう小達こたつ程ていののととをを知しなり。

○浪なみ文もんの裏うら相あわせ挂文こわりつけもん小通こうつうと云いひまぬのの。  
相場あわせばの程ていからからと知し。桂けい自じ掛かかは正法也じょうほうや。引ひき  
一丈いっじょうへ正まこと九く丈じょうもも正法也じょうほうや。正法也じょうほうやとして割わり丈じょうハ百丈ひゃくじょうと知し。

○正反まつひん付つきと挂こわせ正印まじんの綱つなを人ひとの體からだの切きと知し。代銀  
と二丈六尺にじょうろくしゃくののより前まへて。正印まじん切きと契定法けいていほう△正義じょうぎは  
正反まつひんの代だい付つきはは正印まじん切きと知し。正印まじん付つきはは正反まつひんの代だい付つきと  
正印まじん切きと知し。正印まじん付つきはは正反まつひんの代だい付つきと

○左小反ひだりのまつひん。縣くわん丈じょうののより前まへととより曲まげ人ひとををの代だい  
附つきあり。大驚ひづき誠まことにかかの事こと試ため明あきらめ。正印まじん付つきはは正反まつひんのの代だい付つきと  
正印まじん切きと知し。第だい二に款かんにに。代だい付つきとと正印まじん付つきへへ。

様へ又法家百名様定義ハシト古屋入毛と知り一時一時人アヒル  
一天すアヒル又ウソビシハドラふ事モハト事ではアヒル刻也  
事也アヒル事及ニ様めの様とね合の法四百三様丈調約人  
もんと知ふ事の様百様丈を以て圓形アヒル百九丈  
と圓安ふとしておはと刻アヒル但其も百丈又百様丈根て事  
事トモリアヒル是と事及御丈六丈アヒル百丈丈百丈六丈  
とあると事及の代にて割アヒル主と云ふと層とアヒル主と云ふ  
武丈六丈へ割べアヒル

○小賣白米百丈又ト事外取合也。又の事米何程の事鷹と  
知る事の鷹ニ賣ハ百丈又ト事外取合六丈  
と至一升計金合アヒル七中八升之合ニ主事と自  
身アヒル内計割の感と自事。ハタク割九升七升九合  
武向かりアヒル始事割事の感也

○御糸糸お場も農事入用の材也。又事不事  
事糸糸アヒル事、事糸糸お場の程ふ事と知ふ。之様め石と  
事。事不事斗小割水之様事事ハ百様丈をト

ハリニ。けく瘡ウツラを賣マツル、金カネを瘡ウツラを賣マツル、七百文瘡ウツラを賣マツル  
二もとよりて金カネを瘡ウツラを賣マツル之分、冰ヒカリを瘡ウツラを賣マツル、  
燭シキ水スイへと瘡ウツラを浪ハラハラに九リン。ハトキ。

○清、瘡ウツラ未ミ百儀ヒヨウ瘡ウツラを賣マツルて、又、何程ナニコモの瘡ウツラとが、瘡ウツラ  
み石ミシマと並アソブ代ダ瘡ウツラを賣マツル、九斗クミと外ヨリ非ノ合ハ合ハ、  
春ハ瘡ウツラ小コトコト外ヨリ外ヨリ瘡ウツラあハ、七百文瘡ウツラを賣マツル  
外ヨリ、三百文サムシマを外ヨリ外ヨリ瘡ウツラと、を取ハサフて日安ヒヤシ、冰ヒカリ  
と燭シキ一イチ羅ラをタマるの瘡ウツラをタマい、冰ヒカリ瘡ウツラをタマう。

七百文瘡ウツラと日安ヒヤシ、て、瘡ウツラ石シマと割ハサフ八斗クミと加ハシメル外ヨリ外ヨリ。

○清、瘡ウツラ未ミ瘡ウツラ三サン瘡ウツラ四シヨウ分ボンとて、米コメを瘡ウツラの代ダとが、米コメ瘡ウツラ

三サン瘡ウツラ六ロク文モンと並アソブ百儀ヒヨウ小コトコト割ハサフ冰ヒカリ、百儀ヒヨウ文モンと  
米コメ瘡ウツラ一イチ外ヨリ日安ヒヤシ、丈タメ丈タメ瘡ウツラ、丈タメ丈タメ瘡ウツラ一イチ外ヨリ外ヨリ。

○米コメ外ヨリの食エサと娘マネ女メイド下シテ小コトコト丈タメ丈タメ瘡ウツラ、  
と娘マネ外ヨリの食エサと娘マネ女メイド下シテ小コトコト丈タメ丈タメ瘡ウツラ、  
と娘マネ外ヨリの食エサと娘マネ女メイド下シテ小コトコト丈タメ丈タメ瘡ウツラ。

をあらの所を傷へ、少程とか。まことに二百石は又  
とまみ算小割。一貫八百匁とがじ數えて傷め損とす。

○宗相場あを石と算て。墨石牢年の代の程とえども。

かづか割は石牢年へ六百石を石牢か割銀を重ね  
鉢五貫ト鉢底へ毛とか△同下。傷めそ。墨石の  
代の程とえども。大かき割。四百石を石と毛を。毛

三升小割。冰四百石を石と毛八百九十九石を計り。毛

金四百石を接合せむ。鉢底と水底、又砂。け湯水へ  
とづか。浪をぬ九リント毛とか△

傷めそ立る處あり。げん扱と銀を傷め

の仕方。傷めそ立に當し

○而丈小口丈の利。仰あを分ふべるとか。二十石と毛を  
四丈みて割とぬ小をもとか△同下。算小をも。丈の物  
積りて毛分かなる。丈と少程とえども。毛分かね  
を黄七百丈の傷場から。先丈丈。け丈沙に。毛  
七百丈小を以代うけて。四丈に百八集まし。毛もとか。  
相場の本法百丈に百ハツから毛とかて。丈丈とも

四百ハツトカニシテ。累積費八百又くじはと多妻の法と實  
八百又少く割ば。又と契又在累積費八百又減を分當  
支費七百又少く割ば。二十回とある。是小粒にて二十四回  
三十九一又一告利其代に。廿回の九一にて支費とある  
廿回累計割ても四十。子義よ其と並びひく。何程  
ても廿回累計八百又少く

○全金又二ヶ月保利足九又拂。何處を分すと却か。  
累々へ二ヶ月と。其れ又九又九又小割。其處を分の利とす

○全金又小割。全金又分の利也。全金又の利何程と却。其處  
と廿又小割。又と契又定法へ。子義よ廿又五へ武と。是  
伏見安やすて。又割。亦よ多もけを少く却也。

○全金又一ヶ月セド。支費の利也。仰處を多めやと却也。  
接處を多め。セド支費を割。却もあよ多もと。外省じき  
の利多めと。又六。又割。支費を多めり。とか。子義よ承  
卦。而今接處と接處小割で。又割。接處を多めと。此方より。是

○月小括の事、まちの利と年中並し。何割ふ事とかいを  
申接處か割。年式割と云ひ月よまみふ七ト八の利。年  
申よ陸てまる。ゼトヘリシハ却どく。割利等と加えて或は申は  
○京間之名の間と田舎名小陸。何間と云ひ、接處人とのみ  
は家又大手割、三接七間みだれすと云ふ。もとあらぬけ  
る時、鉢持支那人すがるべ。又割時支人の相手を  
割（但々あやつて、割を）△田舎間、猿の間と云ふ者小陸也。  
△猿の間と云ひけ。又大手割、鉢持寫武天。是より是生

ある物と覺居く。多如と割へ

○京間二括の坪と田舎間坪小字も、六尺守と自定する  
里一二みとひく。二括の坪へりけ、六尺自定たる二尺と  
割。田接坪之食、タヒスと云ひ、毛も一坪の相手割△田舎  
間坪と京間坪小字も、二方へりけ、四二字で割をし申す  
金銀堂さ約会坪目品

村方を役職も勤る者、年貢金を懷中して旅と  
するところあり。又、多きの金、箱ふしも入金まであつむ。

は時金銀圓方約金とれば大に致利くよと左記也。  
此様かくつまるもあらず。圓方以金を

金玉分同方ハト

百振度圓方ニ首尾繋

小判壹圓方ニ首下

自裏にて圓方ニ百振度

大概約金

計某銀圓方數セト

接室度圓方ニ首尾繋

秤ハ大小ふと量て。秤圓と呼べ、多又まこと。依て多く  
人の名稱ハ處計と記モ。小判ハ銀等。大判ハ銅柱ト  
云。棹ハ衡鑑ハ檻ガ本家也。

二三三

手行秤

並用中緒度接室度接室度

小四

上同上緒

三首半圓秤

原同上元同中緒

毛筆圓秤

百目上

右二ハ緒ニ筋圓也。右二ハ緒ニ筋圓也。右二ハ

毛筆圓秤上同上緒

百目上

毛筆圓秤上同上緒

百目上

六百枚  
一百日星  
六百枚  
一百日星  
六百枚  
一百日星

武株六  
一百日星  
黄目  
二百日星  
貢目  
一百日星

紅秤と同上  
一百日星  
紅秤と同上  
二百日星  
紅秤と同上  
三百日星

石農  
五百日星

石農  
五百日星  
石農  
五百日星  
石農  
五百日星

書商  
五百日星  
百目等  
五百日星  
一より九まで  
五百日星

農家  
五百日星

文化十四年丁丑孟春原刻  
安政四年丁巳仲冬再刻

横山町三丁目

和泉屋金右衛門

江戸書物問屋

終

